中純子著

# 『唐宋音楽文化論―詩文が織り成す音の世界―』（知泉書館、2020 年）

おやさと研究所主任
堀内みどり　*Midori Horiuchi*

著者は、おやさと研究所のかつての同僚である。天理大学の学部に異動されたが、『グローカル天理』での連載をはじめ、研究所の研究会での発表など、その後も研究所との関わりは深い。『グローカル天理』での連載は、2008 年に『中国音楽の泉』(「グローカル新書」第９巻）に結実している。

本書は、唐宋時代の楽器が奏でる音に注目し、人々の暮らしに存在していたその音を、詩文の力の中に追求している。そして、詩文が楽器の音／音色を織り上げていった音楽を人々がどのように享受していたかを解きほぐしていく。著者は、今まで語られてきた唐代音楽の常識を別角度から見直していくことで、これまで考えてこなかった唐代音楽の実相を見てみたいという。「外来音楽は果たして唐代一代を通じて盛んに流入していたのか？」「霓裳羽衣曲（げいしょうういのきょく）は本当に玄宗期の代表的な宮廷音楽と言えるのか？」など、いくつもの課題を自らに問いかけ、その一つひとつが研究成果として示されている。本書は専門的な学術論文で構成されている。本書のカバー裏面の紹介文によって、内容を紹介する。

魅惑的な外来音楽が盛んに演奏され、都長安の音楽文化が華開いた唐代、そしてそれが宮廷に留まらず巷にも流行し、その新な曲調に合わせ詞を付す塡詞（てんし）という文人の娯楽が出現した宋代―当時を生きた人々は、実際にどのように音楽を享受していたのだろうか。

本書は、これまで知られてきた唐宋の音楽世界を、詩文など豊穣な文献資料を用いて丁寧に見直し、その実相を提示する本格的な業績である。

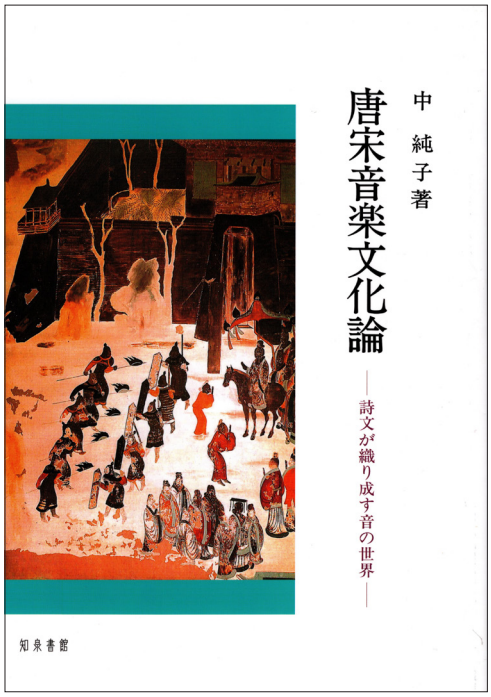
第１部は、今なお演奏される伝統音楽の洞簫（どうしょう）、及び盛唐を代表する「霓裳羽衣曲」が詩文として構成に伝えられる中で、一つの音楽像を形成していく姿を捉える。

第２部では、玄宗期に完成した礼楽儀礼とそれを掌（つかさど）った太常寺の意味を張説の詩文から読み解く。さらに辺境音楽の涼州曲を取り上げて、外来音楽が主流とされた唐代音楽世界を改めて見つめ直す。安史の乱と宮廷音楽との関係、楽人の離散による地方への音楽伝播、加えて唐代と宋代の音楽に対する考えの違いをも解明する。

第３部では、李白・王維・蘇軾（そしょく）の音楽描写から、都を追われた詩人が見た日常の音の世界を浮彫りにする。

詩文は楽曲や楽器を意味づけつつ、人々の間に広まっていった。本書は『詩人と音楽』の姉妹編で、読者に中国独特の音楽世界を紹介し、詩文に依拠して、唐宋の音色を今に伝える一書として貴重な作品である。

第１部で扱っている洞簫は、漢代のパンパイプ型の簫ではなく、添えられた図にあるように、縦笛のような形をしている。80㎝ほどの長さがあるという。『霓裳羽衣曲』の曲は、玄宗が婆羅門系の音楽を元に作った曲と言われるが、安史の乱以降、この曲は傾国の曲であると忌まれ、楽譜も散逸したらしい。白居易の「長恨歌」に曲名が登場する。この安史の乱は、安禄山の乱とも記載される。唐が最盛期を迎えた玄宗皇帝の末期(755～756 年)に、節度使と呼ばれた唐の辺境を守っていた武将の安禄山とその部下の史思明らによって起こされた反乱で、「長恨歌」で謳われた楊貴妃によって、その最盛期の唐は国が乱れたという背景があるとされる。




第３部に登場する蘇軾は、11 世紀後半の北宋の政治家で、２度にわたり左遷された経験を持つが、格調高い詩文が知られ、古文の復興をめざした唐宋八大家の一人に数えられている。なお、これに関連して、同じ著者による『詩人と音楽―記録された唐代の音』は、2008 年に知泉書館から出版された研究書で、この本は中唐の詩人白居易の詩と音楽の結びつきに焦点をあて、詩人が音楽をどのように詩に写し取り、伝承され、唐代音楽史の重要な資料として後世にいかに広く利用されたかを多様な視点から考察している。

本書の目次は以下の通りで、３部から成り、全 10 本の論文で構成されている。

第１部　詩文により音楽世界の創出
　第１章　詩賦がもたらす楽器のイメージ―洞簫をめぐって
　第２章　詩が創出した唐の代表曲―霓裳羽衣曲
第２部　詩文で辿る唐宋音楽の実相
　第１章　唐代開元期における礼楽世界の完成―張説が描いた世界
　第２章　辺塞音楽の中国化―涼州詞と涼州曲
　第３章　唐宋音楽を繋ぐもの―唐代中盤期の蜀の音楽文化
　第４章　唐宋期の古楽復興―古楽をめぐる言説から見えるもの
第３部　詩人と音楽の世界
　第１章　イメージの中の音楽
　第２章　音の定式からの解放―王維が開いた日常の音の世界
　第３章　宋代文人と音楽―黄州における蘇軾の音楽文化探究
　第４章　詩材としての日常の音―蘇軾が描く音の世界